

日本語のオノマトペ「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」の記述的研究

杉村 泰

DOI: 10.18999/stul.31.111

1. はじめに

日本語には「ビリビリ」、「ジンジン」、「チクチク」のように痛みを表すオノマトペがたくさんある(図1)。これらの表現は「ビリビリ」なら痺れるような痛み、「ジンジン」なら焼けるような痛み、「チクチク」なら針で刺すような痛みを表すというように、痛みの違いを端的に言い分けることができる(図2)。そのため、医療や介護の現場では医者と患者、介護をする人とされる人の間で意思疎通をするのに役立っている(吉永・宮田・鈴木 2012、秋田 2016、オノマトペラボ¹など)。しかし、日本語学習者はこれらのオノマトペの意味の違いを必ずしもよく理解しているわけではない。そこで本稿では、日本語教育のためのオノマトペ研究の一環として、「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」の違いについて論じる。



図1 痛みを表すオノマトペ

(タカノスカイプロラクティックのHPより)²



図2 神経障害性疼痛の図

(疼痛.jp のHPより)³

¹ <http://onomatopelabo.jp/index>

² http://taka-nous.com/pain_all/

³ <http://toutsu.jp/>

2. 先行研究

本稿で見る「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」は、摩擦、熱、辛味、電流などの刺激による痺れるような痛みを表す点で共通している。これに関して小野(編)(2007)では次のように記述している。

小野(編)(2007:382-385)(例文は省略)

ひりひり ① **さま** 皮膚、神経などが焼けつくように痛み続けるさま。また、切迫した緊張感が伝わるさま。② **さま** のどが痛いほどかわくさま。③ **さま** 持続的に鋭い辛みを感じるさま。④ **さま** 古 細長いもの、小さいものなどがこきざみに動くさま。ひるがえるさま。⑤ **さま** 古 苦しきにもだえてけいれんするさま。

ぴりぴり ① **音** 笛などをかん高く吹き鳴らす音。② **音・さま** 紙や布などが続けざまに裂ける音。また、そのさま。③ **さま** こまかにふるえ動くさま。ぴくぴく。④ **さま** 心や神経を強く刺激するさま。神経が興奮するさま。⑤ **さま** 鋭い刺激や痛みを感じ続けるさま。⑥ **さま** 方言 こまかい雨が降るさま。〈兵庫県〉

びりびり ① **音・さま** 紙や布などが裂ける音。また、そのさま。② **音・さま** ものをこまかく振動させるほどひびく大きな音。また、そのさま。③ **さま** こきざみにはげしくふるえ動くさま。ぶるぶる。④ **さま** 古 飢えているさま。欲情するさま。でれでれ。⑤ **さま** 心や神経を強く刺激するさま。刺激を受け、神経を高ぶらせて興奮するさま。⑥ **さま** 強い刺激や痛みを感じ続けるさま。

ひりっ **さま** 一瞬、刺激や痛み、辛みを感じるさま。

ぴりっ ① **音・さま** 紙や布などが勢いよく裂ける音。また、そのさま。② **さま** 一瞬、鋭く辛みを感じるさま。瞬間的な刺激をうけてしびれるさま。③ **さま** 体が引き締まるようなさま。態度に一本、筋が通っているさま。④ **さま** 一瞬ふるえ動くさま。

びりっ ① **音・さま** 紙や布などが勢いよく裂ける音。また、そのさま。② **音・さま** 空中を電気がはしる音。また、そのさま。

ひりり ① **さま** 鋭い刺激や痛みを瞬間的に感じるさま。② **さま** 体をふるわせるさま。こきざみにふるえ動くさま。

ぴりり ① **音・さま** 薄い紙や布などが勢いよく裂ける音。また、そのさま。② **さま** 一瞬鋭く辛みを感じるさま。瞬間的な刺激をうけてしびれるさま。③ **さま** 一瞬ふるえ動くさま。

④ **さま** 体が引き締まるようなさま。態度に筋の通ったきびしさのあるさま。

びりり ① **音・さま** 紙や布などが勢いよく裂ける音。また、そのさま。② **音・さま** 空中を電気がはしる音。瞬間的な刺激をうけてしびれるさま。

さらに小野(編)(2007)は「ひり」、「びり」、「びり」の3つを比較して、「ひり」は、表面がこすれるような刺激、「びり」は軽く刺すような刺激に対して使われ、「びり」は、電気がはしるような刺激をいう。いずれも「り」が付くと、刺激が瞬間であるようす、促音「っ」が付くと、さらに急激な一瞬の刺激を表現する。「ひりひり」などの繰り返し形は、刺激が継続するようすを表し、さらに、その刺激によってこきざみにふるえるようすも表す。「ひり」「びり」「びり」と、ふるえ方の程度が大きくなる」(p.383 この部分、早川文代氏執筆)と指摘している。

また、星野(2009)は「国研領域内公開データ(2008年版)」、「青空文庫」、「新潮文庫の100冊」をコーパスとして利用して、「ヒリヒリ」、「ピリピリ」、「ビリビリ」の語義と特徴について記述し、この3つの違いを次頁の表1のようにまとめている。

星野(2009:57-59)(例文は省略)

ひりひり

《語義》辛味の刺激や、すりむいた傷の痛みを感じるさま。

▽比喩的に「文章に一する所があるのがいい」のようにも使う。

- ・「辛味」より「痛み」の用例が圧倒的に多い。「ひりひり」と表現される辛味の主体は「唐辛子・山椒・大根」である。
- ・「痛み」は「傷」以外に「喉・唇・目」などの粘膜や「皮膚」も感じる。原因は「酸・熱・乾燥」などの強い刺激であり、述語は「する・痛む・しみる・痛い」などである。
- ・さらに「痛み」は抽象的になり「心」でも感じるようになるが、刺激が「視線」の場合は肌にも感じる。「焦燥感・熱い思い」などは「ひりひり」の「激しさ」を示唆する。

びりびり

《語義》皮膚・口の中などが強い刺激を感じるさま。また、神経が過敏になっているさま。

- ・《語義》の前半、刺激を感じる主体は「皮膚・口中」である。述語には「痛い・痺れる・する」があり、原因も「風・陽・傷」など清音の「ひりひり」と同じようである。
- ・濁音「びりびり」の語義が二つに分けてあることを考えると、半濁音の「びりびり」も生理的な「刺激」を記述する前半の副詞用法と、「神経過敏」を意味する後半の形容

動詞用法⁴は分けたほうがよさそうである。

- ・ 身体部分の「震え」から空気振動の「音」へ、さらに「紙類を破る音・さま」へも発展する点も「びりびり」と同じである。

びりびり

《語義1》物が小刻みに震え動く音。そういう様子。

《語義2》急に電気などの刺激を受けた時の、しびれるような感じがするさま。

- ・ 《語義1》には「震える・振動する・響く」などが述語として使用される。主体は「窓ガラス・扉・壁」などの立て付けや「空気・鼓膜」などであり、原因は「声・笛の音・衝撃波」などの空気振動である。振動が「小刻み」であることは主体が枠など固定されていることから類推できる。
- ・ 《語義2》の「刺激」には「電気」以外に「振動・驚き・恐怖」などがある。「恐怖」は体の「震え」を伴い、「痺れ」も「震え」につながる。意味は「音響」から単なる「振動」へ、さらに痛みのような「刺激」へと発展する。
- ・ 「びりびり」は「振動音」から「紙や布を裂く音・さま」へと用法が伸びる。これは「痺れる」よりも用例が多いが、『岩波』⁵は「音」の記述を避ける傾向があるのでこの語義の記述はない。ここで形容動詞用法⁶に発展する。

表1 星野(2009)の〈ひりひり・びりびり・びりびり〉のまとめ⁷

	音	振動	痺れ	辛味	痛み	破	苛立ち	過敏	サ変	副詞	形動
ひりひり	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×
びりびり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
びりびり	○	○	○	×	○	○	×	×	○	○	○

これらの研究を受け、本稿ではコーパス(BCCWJ)を利用して、「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」の被修飾語(動詞など)と主体または対象⁸の違いを見ることにより、各形式間の相違や各形式内の多義構造を詳しく見ていく。

⁴ 神経過敏の場合も「ピリピリ(と)」の形になるので、形容動詞用法は副詞用法の誤りではないと思われる。

⁵ 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(編)(2000)『岩波国語辞典』(第6版)を指す。

⁶ 形容動詞用法というのは「ビリビリに(破る)」のようなもののことである。

⁷ 「ピリピリ」と「ビリビリ」の順番は本稿の順番に合わせて入れ替えてある。

⁸ 「神経がピリピリする」なら主体、「神経をピリピリさせる」なら対象であると考えられる。

3. 痛みの部位に関する意識調査

まず、日本語母語話者と学習者が「ヒリヒリ」、「ピリピリ」、「ビリビリ」をどのように認識しているか見る。本研究では痛みを表す「ガンガン」、「キュンと」、「キリキリ」、「キンキン」、「シクシク」、「ジンジン」、「ズキズキ」、「ズーン」、「チクチク」、「ツーンと」、「ドーンと」、「ヒリヒリ」、「ビリビリ」、「ピリピリ」、「ミシミシ」の15語のオノマトペについて、次の被験者を対象に以下のアンケート調査を行った。答えが分からない場合には想像で回答してもらった。

[被験者]

- ・日本語母語話者

名古屋大学学部生 61 名 (2017 年6月 29 日、7月 11 日、名古屋大学で実施)

- ・中国語を母語とする上級日本語学習者 (全員N1合格)

名古屋大学留学生 19 人 (2017 年7月7日～17 日、名古屋大学で実施)

- ・中国語を母語とする初級日本語学習者 (全員日本語学習歴8か月。この時点ではまだ授業ではこの15語のオノマトペを学習していない)

上海師範大学外国語学院日語系1年生 25 人 (2017 年5月 15 日、上海師範大学で実施)

[アンケート]

問 次の括弧の中に適当な身体部位を入れてください。また、それはどのような痛みだと思いますか(中国語で説明して構いません)⁹。

1. () が ガンガン 痛む。 ()

:

15. () が ミシミシ と痛む。 ()

その結果、痛みの部位に関して表2～表4の結果を得た。まず、「ヒリヒリ」の場合、日本人は「肌/皮膚」を選んだ人が約半数と多く、次いで「手」や「顔」の各部分が選ばれている。一方、上級学習者も「肌/皮膚」や「顔」の各部分を選んだ人が多いが、「手」は選ばれていない。初級学習者は「肌/皮膚」を選んだ人が少なく、選択範囲が全身に及んでいる。

⁹ 括弧内の注は中国人学習者にのみ付けた。

また、「ヒリヒリ」の痛みの内容について、日本人は「日焼け」、「やけど」、「すり傷」による痛みと回答した人が多かった。一方、上級学習者も“火辣辣的痛”（焼けつくような痛み）、「辛いものを食べたときの痛み」と答えた人が多く、日本人に近い感覚で捉えていた。しかし、初級学習者は「軽い痛み」、「刺すような痛み」、「連続的な痛み」など回答がまちまちで、想像するのさえ難しいことが分かる。ただし、「ヒリヒリ」は「ピリピリ」や「ビリビリ」と比べて痛みの程度が軽いと答えている人が4人いたことは興味深い。初級学習者でも音韻的に「hi」より「pi」や「bi」の方が刺激の程度が高いと感ぜられるようである。

表2 「ヒリヒリ」の痛みの部位に関する意識調査（回答数と割合）

	日本人		上級中国人学習者		初級中国人学習者	
1	肌/皮膚	32(52.5%)	肌/皮膚	4(21.1%)	足	4(16.0%)
2	手	6(9.8%)	顔	4(21.1%)	手	3(12.0%)
3	顔	3(4.9%)	喉	3(15.8%)	肌/皮膚	2(8.0%)
4	膝	3(4.9%)	舌	2(10.5%)	顔	2(8.0%)
5	目	2(3.3%)	頭	1(5.3%)	歯	2(8.0%)
6	舌	2(3.3%)	目	1(5.3%)	腹	2(8.0%)
7	頬	2(3.3%)	歯	1(5.3%)	指	2(8.0%)
8	腕	2(3.3%)	腹	1(5.3%)	目	1(4.0%)
9	傷口	2(3.3%)	腰	1(5.3%)	耳	1(4.0%)
10	歯	1(1.6%)	傷	1(5.3%)	胸	1(4.0%)
11	背中	1(1.6%)	合計	19(100%)	胃	1(4.0%)
12	手の甲	1(1.6%)	/		腕	1(4.0%)
13	指	1(1.6%)			足・手	1(4.0%)
14	手足	1(1.6%)			腰	1(4.0%)
15	足	1(1.6%)			心	1(4.0%)
16	火傷	1(1.6%)			合計	25(100%)
	合計	61(100%)				

次に「ピリピリ」の場合、日本人は「舌」や「口」を選んだ人が多く、次いで「肌/皮膚」、「手」、「足」が選ばれている。一方、上級学習者も「舌」を選んだ人が最も多く、次いで「肌/皮膚」、「喉」、「胃」が選ばれている。しかし、「手」と「足」を選んだ人は合わせて1人しかいなかった。さらに初級学習者は「舌」や「口」を選んだ人がおらず、音から「ピリピリ」の持つ「辛いものを食べたときの痛み」という意味を連想するのは難しいことが窺える。

また、「ピリピリ」の痛みの内容について、日本人は「辛いものを食べたときの痛み」と答えた人が15人(24.6%)と最も多く、続いて「痺れるような痛み」が13人(21.3%)、「電流の流

れたような痛み」が5人(8.3%)となっている。一方、上級学習者は「辛いものを食べたときの痛み」が6人(31.6%)と最も多く、「電流の流れたような痛み」も2人(8.0%)いたが、初級学習者は全体的に答えがまちまちで、痛みの内容を想像しにくいことが分かる。

表3 「ピリピリ」の痛みの部位に関する意識調査 (回答数と割合)

	日本人		上級中国人学習者		初級中国人学習者	
1	舌	12(19.7%)	舌	5(26.3%)	腹	4(16.0%)
2	肌/皮膚	11(18.0%)	肌/皮膚	2(10.5%)	足	4(16.0%)
3	手	8(13.1%)	喉	2(10.5%)	頭	3(12.0%)
4	口	7(11.5%)	胃	2(10.5%)	肌/皮膚	1(4.0%)
5	足	7(11.5%)	顔	1(5.3%)	目	1(4.0%)
6	指	4(6.6%)	唇	1(5.3%)	耳	1(4.0%)
7	歯	3(4.9%)	腹	1(5.3%)	鼻	1(4.0%)
8	(未記入)	3(4.9%)	背中	1(5.3%)	歯	1(4.0%)
9	頭	1(1.6%)	膝	1(5.3%)	胃	1(4.0%)
10	背中	1(1.6%)	指	1(5.3%)	手	1(4.0%)
11	胃	1(1.6%)	足	1(5.3%)	指	1(4.0%)
12	腕	1(1.6%)	(未記入)	1(5.3%)	手・足	1(4.0%)
13	足先	1(1.6%)	合計	19(100%)	腰	1(4.0%)
14	足の裏	1(1.6%)	/		股	1(4.0%)
15	合計	61(100%)			膝	1(4.0%)
16					踝	1(4.0%)
17					心	1(4.0%)
					合計	25(100%)

最後に「ビリビリ」の場合、日本人は「足」を選んだ人が最も多く、次いで「肌/皮膚」、「肘」、「手」を選んだ人が多かった。一方、上級学習者と初級学習者はどちらも日本人とはかなり違う選択をしており、「足」の選択率が低くなっている。

また、「ビリビリ」の痛みの内容について、日本人は「痺れるような痛み」と答えた人が31人(50.0%)と最も多く、次いで「電流の流れたような痛み」が11人(18.0%)となっている。日本人は「ビリビリ」と聞いてまず、足の痺れや肘などを打った時の痺れを連想するようである。一方、上級学習者は「電流の流れたような痛み」が4人(21.1%)、「痺れるような痛み」が1人(5.3%)いたものの、初級学習者は「電流の流れたような痛み」が1人(4.0%)、「痺れるような痛み」が1人(4.0%)ただけで、音から痛みの内容を想像するのは難しいことが分かる。

表4 「ビリビリ」の痛みの部位に関する意識調査 (回答数と割合)

	日本人		上級中国人学習者		初級中国人学習者	
1	足	22 (36.1%)	舌	3 (15.8%)	目	5 (20.0%)
2	肌/皮膚	6 (9.8%)	手	3 (15.8%)	腹	4 (16.0%)
3	肘	6 (9.8%)	喉	2 (10.5%)	足	3 (12.0%)
4	手	6 (9.8%)	腹	2 (10.5%)	体/全身	2 (8.0%)
5	舌	4 (6.6%)	体全体/全身	2 (10.5%)	歯	2 (8.0%)
6	腕	3 (4.9%)	肌/皮膚	1 (5.3%)	髪	1 (4.0%)
7	(未記入)	3 (4.9%)	足	1 (5.3%)	顔	1 (4.0%)
8	肩	2 (3.3%)	胸	1 (5.3%)	耳	1 (4.0%)
9	手足	2 (3.3%)	胃	1 (5.3%)	喉	1 (4.0%)
10	頭	1 (1.6%)	指	1 (5.3%)	胸	1 (4.0%)
11	唇	1 (1.6%)	膝	1 (5.3%)	腕	1 (4.0%)
12	背中	1 (1.6%)	(未記入)	1 (5.3%)	手	1 (4.0%)
13	膝	1 (1.6%)	合計	19 (100%)	手・足	1 (4.0%)
14	足先	1 (1.6%)	/		心	1 (4.0%)
15	足の裏	1 (1.6%)			合計	25 (100%)
16	体	1 (1.6%)				
	合計	61 (100%)				

以下、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版)」(BCCWJ)¹⁰の「中納言」を利用して、各オノマトペの被修飾語と主体または対象の違いについて見る。検索においては全資料を次のように短単位検索して、手作業でごみを取り除いた。

・キー 語形が[ヒリヒリ] (or ヒリッ/ヒリリ/ビリビリ/ビリッ/ビリリ/ピリピリ/ピリッ/ピリリ)

4. 「ヒリヒリ(と)」、「ヒリッ(と)」、「ヒリリ(と)」¹¹

4.1 「ヒリヒリ(と)」、「ヒリッ(と)」、「ヒリリ(と)」の被修飾語

まず、「ヒリヒリ」、「ヒリッ」、「ヒリリ」の被修飾語を表5～表7に示す。これを見ると、「ヒリヒリ」は「ヒリヒリ(と)する」の形で使う場合が 90 例(65.7%)と圧倒的に多く、「ひりひりだ」は2例

¹⁰ 検索対象語数:124,100,964 語、空白・記号・補助記号を除いた検索対象語数:104,911,460 語。

¹¹ 5節で「ビリビリ(と)」(副詞用法)と「ビリビリに」(形容動詞用法)を区別するために、節タイトルと表のタイトルでは「と」を付けてあるが、「と」の有無については踏み込んで議論しないことにする。なお、秋田(2016)は「と」の介在する引用副詞用法と「と」の介在しない裸副詞用法の違いについて論じている。

(1.5%)しかないことが分かる¹²。また、「痛む」や「痛い」のような痛みを表す語は修飾するが、「ひりひり(と)辛い」という用例は1例も出現しなかった。また、「ヒリッ」は1例、「ヒリリ」は2例しか出現しておらず、「ピリッ」や「ピリリ」に比べて使用頻度が少ないことが分かる。

表5 「ヒリヒリ(と)」の被修飾語 (出現数)

－する ¹³	90	刺さる	1	歯痛のように笑う	1
－だ	2	刺激する	1	痛みで攻める	1
－くる	1	激痛が起こる	1	意識する	1
痛む	11	焼けつく	1	動く	1
痛い	10	焼けつくように痛い	1	(視線を)感じる	2
痒みがある	1	熱くなる	1	－感	4
痺れる	1	熱く(心)に残る	1	－φ(動詞) ¹⁴	2
しみる	1	赤くなる	1	合計	137

**表6 「ヒリッ(と)」の被修飾語
(出現数)**

－する	1
合計	1

**表7 「ヒリリ(と)」の被修飾語
(出現数)**

－する	1
辛い	1
合計	2

4.2 「ヒリヒリ(と)」、「ヒリッ(と)」、「ヒリリ(と)」の主体・対象

次に「ヒリヒリ」、「ヒリッ」、「ヒリリ」の主体または対象について見る。これらを整理すると表8～表10のようになる。「ヒリヒリ」の場合、肉体的刺激が119例(86.9%)と最も多く、次いで精神的刺激が16例(11.7%)、動作の様態が2例(1.5%)となっている。肉体的刺激のうち110例は一般的な痛みで、辛味によるものは9例しかなかった。これは星野(2009:57)の「「辛味」より「痛み」の用例が圧倒的に多い」という指摘と一致している¹⁵。身体部位としては皮膚、手足、顔回り、口内に集中し、内臓では肺のみが3例出現している。肺は口から喉を通してつながっており、呼吸による異物の吸引に伴う痛みを表す。また、精神的な刺激は肉体的

¹² 吉永(2016:21)は「ヒリヒリ」を主に「する」が付加され、「だ」は不可できない(Aタイプ)に分類している。ちなみに(Bタイプ)は主に「だ」が付加されるもの(「くたくた(だ/*する)」など)、(Cタイプ)は「する」と「だ」が両方付加できるもの(「ふらふら(する/だ)」など)、(Dタイプ)は特定の動詞と結びつき、「する」や「だ」が付加できないもの(「ぐっすり(眠る/*する/*だ)」など)である。

¹³ 「している」、「した」などの活用形を含む。以下同様。

¹⁴ 「－φ(動詞)」は「お湯をかけるとヒリヒリ。」のようにオノマトペ単独で動詞用法となっているもの、「－φ(名詞)」は「お母さんのピリピリは伝わります！」のようにオノマトペ単独で名詞用法となっているものを指す。

¹⁵ 小野(編)(2007:383)では「「ひりひり」も「びりびり」も、かつては香辛料の刺激に対して使われていた。しかし、最近「ひりひり」は食の表現には使われないようである(この部分、早川文代氏執筆)と論じている。

な刺激から派生し、焼けつくような心の痛みを表している。他人の視線が肌や首筋を刺激する例は、肉体的な痛みというよりは精神的に視線が気になることを表すため、精神的刺激として数えた。なお、動作の様態を表す用法は現代語ではあまり使わないと思われる。これらの用例を例(1)～例(5)に示す。

表8 「ヒリヒリ(と)」の主体・対象 (出現数)

肉体的刺激(119)				精神的刺激(16)			
肌/皮膚	9	背中	2	腕・背中	1	心	2
喉	9	指	2	手・膝	1	快感	2
顔	7	頭皮	1	腹	1	精神	1
口(痛2、味4) ¹⁶	6	口唇(ヘルペス)	1	足	1	気持ち	1
目	5	顔・耳	1	足の裏	1	焦燥感	1
鼻	5	額・鼻	1	尻	1	不安や恐れ	1
傷	5	上顎・頬の内・喉	1	セガレ(陰茎)	1	自意識	1
舌(痛1、味3)	4	首周り	1	小陰唇	1	焼けつくような愛	1
頬	4	うなじ	1	あそこ(女陰)	1	笑み	1
体/体中/全身	4	顔・腕	1	φ(痛み) ¹⁷	24	肌(視線による)	1
肺	3	腕	1	φ(辛味)	2	首筋(視線による)	1
肛門	3	手	1	動作の様態(2)		φ(精神)	3
頭	2	手のひら	1	体(動く)	1		
唇(痛2)	2	手首の皮膚	1	φ(笑う)	1	合計	137

- (1) (痛み) 日焼けして顔がひりひりして痛いです・・(Yahoo!知恵袋)
- (2) (辛味) 四川料理独特のヒリヒリ痺れるような味も控え目です。(小倉エージ『小倉エージ+理都子の香港的達人』)
- (3) (精神) いまも心に焼き鑊を当てられたように、ひりひりと熱く透子の中に残っている。(篠田真由美『龍の黙示録』)
- (4) (動作) この従順な牝猫は、ひりひりと歯痛のやうに笑つて、私の耳朶を噛んだ。(藤沢桓夫『編年体大正文学全集』)
- (5) (動作) 田宮平兵衛試合の節は、からだは沈みたる方にて真鑰眼となり、からだ、ひりひりうごき、心気みちみちて、(山田風太郎『魔界転生』)

¹⁶ 「口」、「舌」、「唇」については、辛味による味覚的な刺激とそれ以外の痛みの内訳を示した。

¹⁷ 「φ」は検索した用例の中だけでは主体や対象が明示されていないものを指す。何となく推測できる場合でも、「φ」とした。このうち「φ(痛み)」は肉体的痛み、「φ(辛味)」は香辛料などを口にした時の刺激、「φ(精神)」は精神的な緊張感、「φ(破・裂)」は破られたり引き裂かれたりしたときの様態を表す場合の例であることを表す。

また、「ヒリッ」は精神的刺激が1例出現しただけで、「ヒリリ」は肉体的刺激(痛み)が1例、精神的刺激が1例出現しただけである。いずれも「ヒリヒリ」より瞬間的な様態を表している。その用例を例(6)～例(8)に示す。

**表9 「ヒリッ(と)」の
主体・対象 (出現数)**

肉体的刺激(1)	
膚	1
合計	1

**表10 「ヒリリ(と)」の
主体・対象 (出現数)**

肉体的刺激(1)	
♪(辛味)	1
精神的刺激(1)	
表情	1
合計	2

- (6) (痛み) ぬるめの湯は、バンコクに漂う空気のようなのだが、膚へのしみかたにひりっとした殺気があった。(嵐山光三郎『蘭の皮膜』)
- (7) (辛味) 「山椒は小粒でもひりりと辛いぞ。(武田勝昭『ことわざのレトリック』)
- (8) (精神) 式部尚書のカラバッジョがいつぞやとうって変わったひりりとした表情で言いました。(小林恭二『瓶の中の旅愁』)

5. 「ピリピリ(と)」、「ピリッ(と)」、「ピリリ(と)」

5.1 「ピリピリ(と)」、「ピリッ(と)」、「ピリリ(と)」の被修飾語

次に「ピリピリ」、「ピリッ」、「ピリリ」について見る。これらの被修飾語は表 11～表 13 に示すとおりである。これを見ると、「ピリピリ」は「ピリピリ(と)する」の形で使う場合が 139 例(66.8%)と圧倒的に多く、「ひりひりだ」は3例(1.4%)しかないことが分かる。この点で「ヒリヒリ」とほぼ同じである。しかし、「痛む」や「痛い」だけでなく「辛い」も修飾したり、「震える」などの振動を表す語や、数は少ないものの「裂く」、「鳴らす」、「光る」などの語も修飾したりする点で「ヒリヒリ」とは異なっている。

また、「ピリッ」と「ピリリ」は「ヒリッ」と「ヒリリ」に比べて使用頻度が多く、痛みより辛味に使いやすい点や、「効く」など効果を表す語を修飾する点で「ピリピリ」とは異なっている。

表 11 「ピリピリ(と)」の被修飾語 (出現数)

ーする	139	感じる	3	(紙ナプキンを)裂く	1
ーだ	3	張り詰める	2	笛を鳴らす	1
ーくる	2	(神経を)研ぎ澄ます	2	(電流が)光る	1
ーなる	1	(神経を)尖らせる	1	笛の音	1
辛(から)い	3	(神経が)反応する	1	(神経痛のような)痛み	1
痛い	3	(緊張の糸を)張る	1	ー感	6
痛痒い	2	(緊張が)漲る	1	ームード	2
痛む	2	引きつる	1	ー痛	1
痛みを伴う	1	震える	4	ーφ(名詞)	2
痺れる	2	振動する	2	ーφ(動詞)	8
刺激がある	2	震わせる	1		
刺激を感じる	1	揺れる	1		
刺す(ような痛み)	1	振る	1		
坐骨神経痛的に巢食う	1			合計	208

表 12 「ピリッ(と)」の被修飾語 (出現数)

ーする	62	(痛みが)走る	2	ー辛(から)	1
ーくる	4	(電流が)駆け抜ける	1	ー胡椒	1
ーという(辛味)	1	(電流を)感じる	1	ーマスタード味	1
辛(から)い	19	(肩が)震える	1	ーペペロンチーノ	1
辛(から)め	1	ーとも動かない	2	ー中華テイスト	1
苦い	1	効く	17	ーパンチのきいた味付	1
唐辛子がおいしい	1	(文章が)締まる	1	ー辛口発言	1
(味が)いい感じだ	1	(ラインが)入る	1	ーシャープ	1
(味/気分が)引き締まる	2	破る	2	ーアクセント	1
(味を)引き締める	1	切れる	1	ー感	1
(おいしさを)引き出す	1	(日めくりを)めくる	1	ーφ(名詞)	5
(辛みで)涼しくなる	1	(千鳥が)鳴く	2	ーφ(動詞)	2
(走法を)入れる	1			合計	145

表 13 「ピリリ(と)」の被修飾語 (出現数)

ーする	9	効く	7	(光線が)走る	1
辛(から)い	4	(全身/全体を)締める	2	ーラーメン	1
(味に)刺激がある	2	(全身を)引き締める	1	ー笛の音	2
スパイシー	1	シャレッ気(効果)	1	ーφ(名詞)	3
集中する(精神)	1	(笛の音が)聞こえる	2	ーφ(動詞)	1
(空気が)立つ(精神)	1	(笛を)吹く	2		
(赤ら顔が)震える(精	1	(呼び出し音が)鳴る	1	合計	43

5.2 「ピリピリ(と)」、「ピリッ(と)」、「ピリリ(と)」の主体・対象

次に「ピリピリ」、「ピリッ」、「ピリリ」の主体または対象について見る。これらを整理すると表14～表16のようになる。先の「ヒリヒリ」が基本的に肉体的刺激と精神的刺激しか表さないのに対し、「ピリピリ」はこれ以外にも振動、電流、擬音語、破・裂の様態を表す点で違いがある。「ピリピリ」の場合、精神的刺激が126例(60.6%)と最も多く、次いで肉体的刺激が68例(32.7%)、振動が8例(3.8%)、電流が2例(1.0%)、擬音語が2例(1.0%)、破・裂の様態が1例(0.5%)となっている。「ヒリヒリ」とは逆に肉体的刺激より精神的刺激の用例の方が多い点で特徴的である。肉体的刺激のうち49例は一般的な痛みで、辛味によるものは19例であった。これらの用例を例(9)～例(15)に示す。

表14 「ピリピリ(と)」の主体・対象 (出現数)

肉体的刺激(68)				精神的刺激(126)		振動(8)	
肌	11	喉(痛1)	1	神経	20	髭	2
舌(痛1、味3)	4	背筋・額	1	空気	11	手	1
口(痛1、味2)	3	胸・脇	1	雰囲気	5	足	1
口・喉(味3)	3	乳腺	1	ムード	4	葉	1
頭	2	胃	1	緊張感	4	空気	1
口唇(ヘルペス)	2	顔・背中・肩・足	1	顔(表情)	3	ランプ・調度品	1
手	2	指	1	肌	3	銃口	1
手・足	2	仙腸関節	1	声	2	電流(2)	
額	1	腰	1	緊張	2	光るもの	1
こめかみ	1	膝	1	緊張状態	1	IOポート等	2
顔	1	身体中	1	感情	1	破・裂の様態(1)	
顔・首	1	φ(辛味)	11	感覚	1	ペーパーナブキン	1
頬	1	φ(痛み)	8	感じ	1	擬音語(2)	
耳	1	/	/	気持ち	1	笛	2
耳目	1			緊張の糸	1	/	/
歯(痛1)	1			殺気と緊張	1		
歯茎(痛)	1			φ(精神)	65	合計	208

(9) (痛み) ちなみにトウガラシで肌がピリピリするのかなあ～(Yahoo!ブログ)

(10) (辛味) 紅蓼なども唐辛子のようにぴりぴり辛いですが、(平松洋子・柿澤津八百『旬の味、だしの味』)

(11) (精神) 神経がピリピリふるえるくらい敏感になっている。(小西良太郎『美空ひばり』)

- (12) (振動) 紙片を持った手がびりびり顫えている。(江戸川乱歩『陰獣』)
 (13) (電流) びりびりと光るものが蚊帳の表面を流れ、(金治直美『逢魔が刻のにおい』)
 (14) (破・裂) ペーパーナプキンがピリピリと裂きながら、(榎野道流『無明の闇』)
 (15) (擬音語) やがて船長がピリピリと笛を鳴らすと、(司馬遼太郎『甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみち』)

また、「ピリッ」は肉体的刺激(辛味)が 79 例(54.5%)、肉体的刺激(痛み)が 12 例(8.3%)、精神的刺激が 26 例(17.9%)、効果が 19 例(13.1%)、振動が 1 例(0.7%)、動作の様態が 2 例(1.4%)、破・裂の様態が 4 例(2.8%)、擬音語が 2 例(1.4%) 出現した。これらの用例を例(16)～例(23)に示す。

表 15 「ピリッ(と)」の主体・対象 (出現数)

肉体的刺激(91)		精神的刺激(26)		効果(19)			
肌/皮膚	2	空気	1	辛口発言	1	肩のレースアップ	1
脳髄	1	雰囲気	1	諷刺	1	ライン	1
耳	1	気分	1	意見	1	防衛力整備	1
虫歯	1	緊張感	1	コメント	1	アンテナ線	1
歯の周り(痛1)	1	感覚	1	セリフ	1	切れ味のいい音	1
喉	1	態度	1	噂	1	ビルドアップ走	1
背中	1	φ(精神)	20	文章	1	破・裂の様態(4)	
背筋	1	振動(1)		気の利いたサゲ	1	伝票	2
手	1	肩	1	シャープな画像	1	日めくり	1
体	1	動作の様態(2)		赤	1	ひも	1
φ(辛味)	79	目(一動かず)	1	レモン色	1	擬音語(2)	
φ(痛み)	1	影(一動かず)	1	ギンガムチェック	1	千鳥	2
				アクセント	1	合計	145

- (16) (痛み) 背中にピリッとした痛みが走った。(金原ひとみ『蛇にピアス』)
 (17) (辛味) チーズにピリッとコショウがアクセント。(Yahoo!ブログ)
 (18) (精神) 空気はびりっとしてさわやかです。(向井京子『とっさに使える英会話』)
 (19) (効果) 肩のレースアップがピリッときいてる! (『MORE』2003年8月号)
 (20) (振動) その細い肩がびりっと震えたような気がした。(朋秋一『変身』)
 (21) (動作) やはり黒いコブの影は、びりっともうごかなかった。(生源寺美子『きらめいて川は流れる』)

- (22) (破・裂) それからピリッと日めくりをめくる(Yahoo!ブログ)
- (23) (擬音語) 波間をピリッピリッと鳴きながら、群れをなして飛ぶ千鳥、(志村和久『日本語は知れば知るほど面白い』)

また、「ピリリ」は肉体的刺激(痛み)が2例(4.7%)、肉体的刺激(辛味)が21例(48.8%)、精神的刺激が5例(11.6%)、効果が7例(16.3%)、光線が1例(2.3%)、擬音語が7例(16.3%)出現した。これらの用例を例(24)～例(29)に示す。

表 16 「ピリリ(と)」の主体・対象 (出現数)

肉体的刺激(23)		精神的刺激(5)		効果(7)		光線(1)	
舌(味3)	3	全身	2	反対色	1	青い光線	1
肌	1	顔	1	純正色	1	擬音語(7)	
φ(辛味)	18	空気	1	ゴールドパール	1	笛	6
φ(痛み)	1	緊張	1	ファットイニシヤ	1	呼び出し音	1
				科学のスパイス	1		
				シャレッ気	1		
				五月雨の匂	1		

- (24) (痛み) ぴりりとするくらいに加減の湯にひたって(大佛次郎『赤穂浪士』)
- (25) (辛味) 中のカレーはピリリとスパイシー。(『an・an』2005年7月6日号)
- (26) (精神) 空気がぴりりと立つのである。(川上弘美『龍宮』)
- (27) (効果) 反対色を差し色に、ぴりりとしたアクセントを。(渡辺尚子『花時間』)
- (28) (光線) そのとき、空へむけた天竜剣の切っ先からつばへ、ピリリ…と青い光線が走った。(越水利江子『忍剣花百姫伝』)
- (29) (擬音語) 隊長は、ぴりり、ぴりりと笛を吹き、(内田百閒『芥川竜之介雑記帖』)

6. 「ビリビリ(と/に)」、「ビリッ(と)」、「ビリリ(と)」

6.1 「ビリビリ(と/に)」、「ビリッ(と)」、「ビリリ(と)」の被修飾語

最後に「ビリビリ」、「ビリッ」、「ビリリ」について見る。このうち「ビリビリ」は「ヒリヒリ」や「ピリピリ」と違い、副詞用法の「ビリビリ(と)」と形容動詞用法の「ビリビリに」の二つがある。これらの被修飾語は表 17～表 20 に示すとおりである。これを見ると、「ビリビリ」は「ビリビリ(と)する」

の形で使う例は9例(10.0%)と少なく、痛みや痺れのほか、破れ、振動、電動、反響を表す語も修飾することが分かる。この点で「ヒリヒリ」や「ピリピリ」とは異なっている。

表 17 「ピリピリ(と)」の被修飾語 (出現数)

一する	9	響く	3	感じる	5
一くる	4	反響する	1	伝わる	4
一だ	2	鳴る	1	伝染する	1
破く	8	竿鳴りする	1	緊張感が満ちる	1
破れる	2	封書を開ける	1	気が漲る	1
破る	1	耳障りだ	1	取り調べが続く	1
破ける	1	異音が。	1	一神経質	1
破り捨てる	1	変な音が。	1	一ノート	2
引き裂く	2	痛む	2	一感	1
剥がす	2	痛い	2	一φ(名詞)	2
裂ける	1	痺れる	1	一φ(動詞)	3
震わせる	7	しみる	1		
振動する	4	感電する	1		
震える	3	電気が走る	1		
揺すぶる	1	電気が駆け抜ける	1		
揺れる	1			合計	90

一方、形容動詞用法の「ピリピリに」は破れを表す語のみを修飾する。

表 18 「ピリピリに」の被修飾語 (出現数)

破く	13	引き裂く	2	破る	1
一する	3	破ける	2	破れる	1
一なる	3	ちぎる	1	一φ(動詞)	1
				合計	27

また、「ビリッ」は「ピリピリ」に似ており、「ビリリ」は「笛ビリリ」の1例しか出現しなかった。

表 19 「ビリッ(と)」の被修飾語 (出現数)

一くる	2	引き裂く	1	電気が走る	1
一いく	2	突き刺さる	1	音がして口が裂ける	1
一する	1	切り離す	1	という音がする	1
破く	1	筆り取る	1	という鈍い音	1
裂く	1	顫える	1	一φ(動詞)	1
				合計	17

表 20 「ビリリ(と)」の被修飾語 (出現数)

一φ(動詞)	1	合計	1
--------	---	----	---

6.2 「ビリビリ(と/に)」、「ビリッ(と)」、「ビリリ(と)」の主体・対象

次に「ビリビリ」、「ビリッ」、「ビリリ」の主体または対象について見る。これらを整理すると表21～表24のようになる。「ピリピリ」の場合、肉体的刺激が27例(30.0%)、精神的刺激が10例(11.1%)、擬音語が12例(13.3%)、破・裂の様態が27例(30.0%)、振動が14例(15.6%)となっている。肉体的刺激のうち23例は一般的な痛みで、辛味によるものは3例だけであった。これらの用例を例(30)～例(34)に示す。

表21 「ビリビリ(と)」の主体・対象 (出現数)

肉体的刺激(27)		精神的刺激(10)			破・裂の様態・音(27)		
指	4	気	2	緊張感	1	牛乳パック	3
舌(味3)	3	何か	2	靈気か/生气	1	手紙	2
肌	1	肌(彼の気配)	1	取り調べ	1	包装紙	2
顔や手先	1	様子	1	φ(精神)	1	ノート	2
頬	1	擬音語(12)			シャツ	2	
胸	1	女性の声(壁) ¹⁸	1	笛(鼓膜)	1	紙	1
背中	1	大声(店の中)	1	ベルクロ	1	包み紙	1
背中から脳天	1	低い声	1	雷鳴(大地、耳)	1	ラッピング	1
肩	1	異音(弦)	1	竿(竿鳴り)	1	新聞	1
腕	1	爆音(雪の斜面)	1	壁	1	封筒	1
肘	1	エンジンノイズ	1	窓	1	封書	1
爪	1	振動(共振)(14)			封	1	
クリトリス	1	刃り(声) ¹⁹	2	窓ガラス(衝撃波)	1	処方箋	1
つま先	1	空気(声/咆哮)	2	柱(声)	1	テスト用紙	1
体	1	周囲の空間(声)	1	壁(弾着)	1	ズボン	1
φ(痛み)	7	蒼ざめた顔	1	ドア(エレキギター)	1	胸当て	1
		指・腕・胸・体全体	1	門	1	ストッキング	1
		鼓膜(声)	1	家中(泣き声)	1	襟	1
						肉	1
						φ(破・裂)	2
				合計	90		

(30) (痛み) 最近左胸|にびりびりと電気がはしるような感じの痛みがあります。(『Yahoo! 知恵袋』)

(31) (精神) 緊張感がびりびりと満ちている。(堂場瞬一『焰』)

¹⁸ 括弧外は「ビリビリ」という音を立てている主体(ガ格)や対象(ヲ格)を表し、括弧内はその音によって共鳴しているものを表す。(他の擬音語の例も同様)

¹⁹ 括弧外は「ビリビリ」と振動している主体(ガ格)や対象(ヲ格)を表し、括弧内はその振動の元となる音波や衝撃波を表す。(他の振動の例も同様)

- (32) (振動) ドアはびりびりと震えていた。(馳星周『週刊ポスト』2003年7月11日号)
- (33) (破・裂) 新聞をびりびり破いてしまいました。(森田健二郎『プロが隠す秘密の画法「トレース水彩画」入門』)
- (34) (擬音語) 映画館の壁もびりびりと音を立てて振動した。(杉山知之『高齢化時代の住まいづくり』)

一方、「びりびりに」は破・裂の結果の様態が 27 例(100%)出現した。その用例を例(35)に示す。「紙をびりびりと破る」は紙を手などで音を立てて破る動作の様態を表し、「紙をびりびりに破る」は破れた紙の結果の様態を表す。前者の場合、紙は二つに裂けるだけであるのに対し、後者の場合は細かい紙片に分かれるなど原型が大きく損なわれる感がある。

表 22 「びりびりに」の主体・対象 (出現数)

破・裂の結果の様態(27)								
写真	2	切手	1	住宅案内	1	おむつ	1	
お金	2	偽札	1	ぱるる	1	シーツ	1	
制服	2	ラベル	1	ドレス	1	頭巾	1	
紙	1	ふすま	1	着衣	1	国旗	1	
包み紙	1	ぼんぼり	1	ジャケット	1	φ(破・裂)	5	
							合計	27

- (35) (破・裂) その生徒の制服はびりびりに破けていた。(清水義範『ゴミの定理』)

また、「ビリッ」は肉体的刺激(痛み)が6例(35.3%)、精神的刺激が1例(5.9%)、破・裂の様態が7例(41.2%)、擬音語が3例(17.6%)出現し、「ビリリ」は擬音語が1例(100%)のみ出現した。その用例を例(36)~(39)に示す。

- (36) (痛み) 全身の皮膚にビリッと電気が走ったようになり、(明野照葉『ひとごろし』)
- (37) (精神) ごめんね、と髪に唇を押し当てられた。びりっとささくれた神経に突き刺さる
(崎谷はるひ『耳をすませばかすかな海』)
- (38) (破・裂) その膳本を、わたしは、ビリッとさいた。(川越文子『坂道は風の通り道』)
- (39) (擬音語) 彼は少女の腕に手をかけ、服を鋭い力で引き裂いた。ビリッという音がして、彼女の白い二の腕がむき出しになった。(五木寛之『青春の門』)
- (39) (擬音語) ラッパはパッパカ、笛ビリリ(群ようこ『下駄ばきでスキップ』)

**表 23 「ピリッ(と)」の
主体・対象 (出現数)**

肉体的刺激(6)		精神的刺激(1)	
両手	1	神経	1
脚の下	1	破・裂の様態・音(7)	
皮膚	1	手紙	1
背中の筋肉(顫え)	1	新聞	1
φ(痛み)	2	謄本	1
擬音語(3)		原稿用紙	1
腰(に激痛が走る)	1	ページ	1
口(が裂ける)	1	袖やポケット	1
服(を引き裂く)	1	φ(破・裂)	1
		合計	17

**表 24 「ビリリ(と)」の
主体・対象 (出現数)**

擬音語(1)	
笛	1
合計	1

7. まとめ

最後に、今回の調査結果をもとに「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」の意味関係を図3に示しておく。

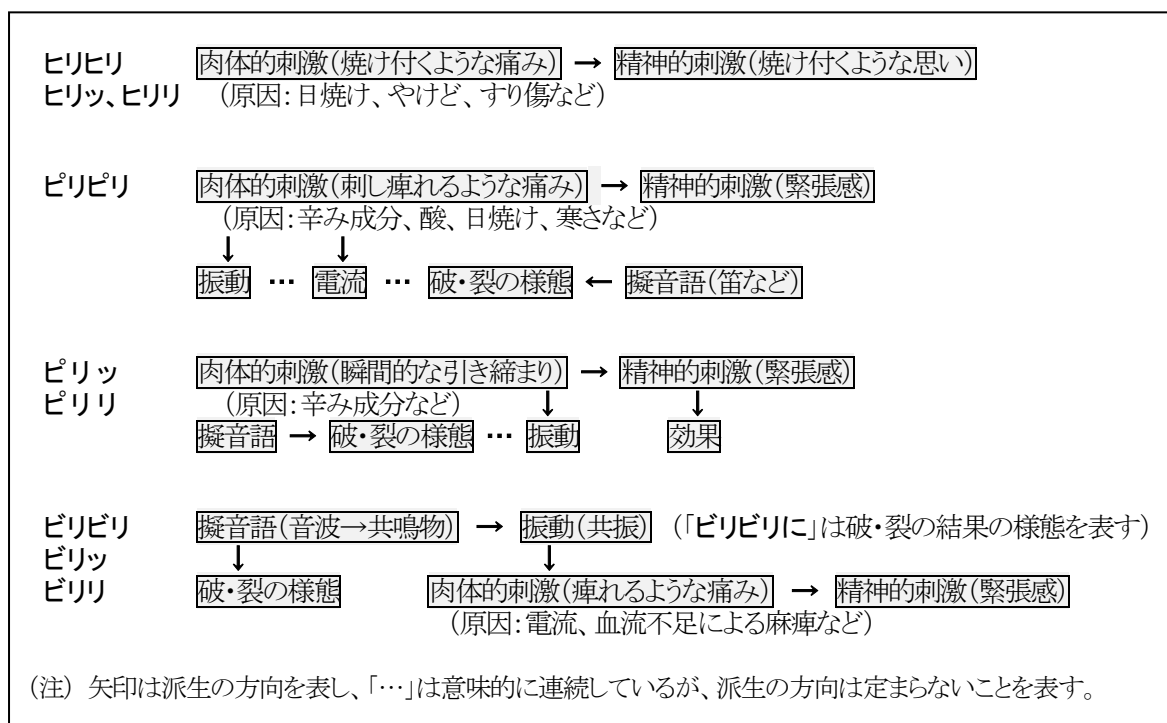


図3 「ヒリヒリ」、「ピリピリ」、「ビリビリ」等の意味関係

「ヒリヒリ」、「ヒリッ」、「ヒリリ」は肉体的刺激(肌などが焼け付くような痛み)を表す用法から精神的刺激(焼け付くような思い)を表す用法へと派生する。また、「ヒリヒリ」が連続的な刺激を

表すのに対し、「ヒリッ」と「ヒリリ」は瞬間的な刺激を表す。ただし、「ヒリッ」と「ヒリリ」はあまり使われないようである。

「ピリピリ」も肉体的刺激(刺し痺れるような痛み)を表す用法から精神的刺激(緊張感)を表す用法へと派生し、肉体の痺れはさらに振動や電流の様態へも派生する。一方で笛などの甲高い音も擬音語の「ピリピリ」で表され、セロファンや薄い紙などを裂くときの様態へと派生する。これは痺れに似た振動を伴うため、振動や電流の様態とも連続する。

「ピリッ」と「ピリリ」も肉体的刺激(瞬間的な引き締め)を表す用法から精神的刺激(緊張感)を表す用法へと派生する。「ピリピリ」がマイナスの意味を伴うのに対し、「ピリッ」はプラスの意味を伴う。さらにここから緩んだ状態を何らかの刺激物で引き締める効果を表すようになる。振動、擬音語、破・裂の様態については「ピリピリ」と同様である。

一方、「ビリピリ」、「ビリッ」、「ビリリ」は擬音語から音波による共鳴、振動(共振)、破・裂の様態、肉体的・精神的刺激に派生していると考えられる。

なお、図3の意味関係は概略を示したものにすぎず、実際にはもっと複雑なネットワークになっていると考えられる。今後はさらにこれらの意味関係を追究して行きたい。

付記: 本稿は平成 27-29 年度科学研究費基金(基盤研究(C))「心身の状態を表すオノマトペの習得研究—医療福祉分野への貢献を視野に入れて—」(研究代表者:吉永尚、課題番号 15K02670)による研究成果の一部である。

[参考文献]

- 秋田喜美(2016)「言語体系の中のオノマトペ」『レキシコンフォーラム』No.7, 19-39
- 小野正弘(編)(2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 星野和子(2009)「オノマトペの意味と用法 —語義記述に必要な情報は何か—」『コーパスを利用した国語辞典編集法の研究』(文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築:21 世紀の日本語研究の基盤整備」辞書編集班:代表 荻野綱男、平成 20 年度研究成果報告書), 44-73
- 吉永尚・宮田久枝・鈴木庸子(2012)「心身の状態表現に関する日本語教育の諸問題 —医療従事者のグローバル化に向けて—」『園田学園女子大学論文集』46, 125-132
- 吉永 尚(2016)「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」『園田学園女子大学論文集』50, 21-28